

鷹島海底遺跡体験記

Report of the Experience in Takashima Underwater Site

片桐 千亜紀・中山 晋

KATAGIRI Chiaki・NAKAYAMA Shin

ABSTRACT: The text describes about our participation in the investigation of Takashima underwater site from September 11 to 14, 2002. The Takashima site is located in Takashima-cho, Nagasaki prefecture, and is known to have been related to the Mongolian invasions in the 13th century. We actually dived to observe the underwater investigation methods that were quite different from the dry-site excavation. In the course of three dives, we learned the entire process of the underwater excavation and the various methods. Although it was merely a three- days experience, we could acquire a number of knowledge about the unknown world of archaeology. We hope to share our splendid experience and to raise the reader's in the underwater archeology.

【鷹島海底遺跡の概要】

鷹島海底遺跡の在する鷹島町は長崎県の北西部に位置する離島である。鷹島は元寇の舞台ともなった島で、南岸に広がる伊万里湾は「元寇・弘安の役（1281年）」の際に暴風雨によって大部分の軍船が破壊的打撃を受けた海域とされている。島の南岸一帯は元寇関係遺物を包蔵する海底遺跡として、1981年には150万㎡が周知の遺跡として指定された。

東アジア中世史の重要な事件である元寇を解明する手掛かりとして、学術調査や緊急発掘調査が数次にわたって実施されており、2001年と2002年は九州沖縄水中考古学協会と鷹島町教育委員会の調査により過去にない成果を挙げている。

鷹島海底遺跡の詳細については鷹島町教育委員会から報告書が刊行されているので、参考文献として最後に紹介する。

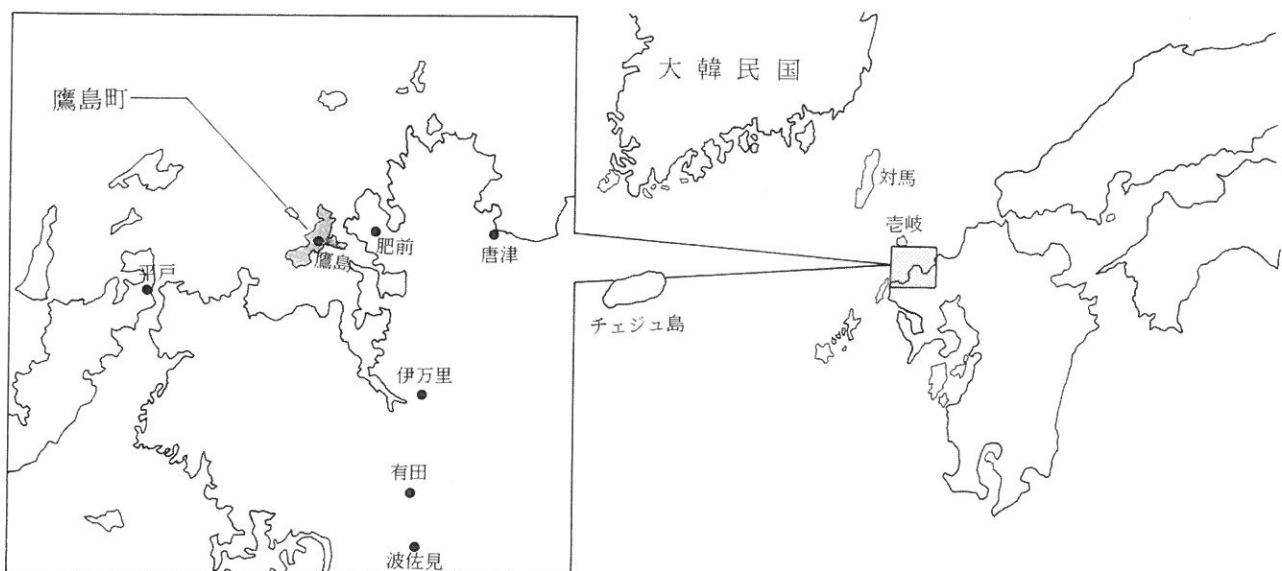


図1 鷹島町の位置

【出 発】

9月11日（水）。鷹島町に行くルートはいくつかあるが、我々が採用したのは以下のルートである。

①空路（那覇空港→福岡空港、約1時間40分）

福岡へ行く飛行機はK・Nとも慣れていたので、熟睡。

②電車（福岡空港→唐津駅、約1時間50分）

二人とも電車の旅は久しぶりである。電車は福岡県から佐賀県へ横断し、車窓からは竹林や山々とともに風光明媚な田舎の風景が見える。沖縄育ちのNは「いいね～」「じつにいいね～」とずっと連呼していた。

③バス（唐津駅→星賀、約1時間）

バスに乗ってとても驚いたことがある。なんと、ブザーをならせば自宅前がバス停になるのである。Nが沖縄に帰ったあと本土出身の知人に話すと「そんなの普通」と言われたが・・・。

④船（星賀港→日比港、約15分）

鷹島に渡る船は接続が悪く、1時間以上小さな港で待ち続けた。二人でボーっと体育すわりをしながら、並んだ船と透き通る海中の魚を眺めて過ごした。腹が減ってはなんとやらと、船の切符売り場兼食堂のチャンポンに舌鼓を打ちつつ、期待を膨らませた。

いよいよ出港。目指す島が目前となったとき、Kの隣ではTシャツだったはずのNがYシャツ姿になっていた。気合いを入れ始めた。約15分波に揺られ、目的の鷹島に到着した。



写真1 星賀港にて船を待つ（N）

鷹島町教育委員会の松尾昭子氏に面識がなく、おどおどしている二人にテンションの高い女性が近づいてきた。松尾氏は我々の緊張をほぐそうと、色々話をしながら現場まで案内してくれた。そこには、まるで我々の知る発掘現場とは思えない空気が漂っていた。

【調査見学初日】

9月12日（木）。いよいよ水中調査の見学である。重たい器材を背負い、調査員の小川光彦氏から潜水水中の現場での注意等を聞いている間、二人の柔な心臓はバクバクと轟音をたてていた。



写真2 現場事務所遠景（神崎港）



写真3 事務所内の通信設備

潜水開始・・・。始めはダイビングに慣れているKからである。一番始めに感じたことは「透明度が悪く、周囲が全然見えない。」ことである。青く透き通った沖縄の海しか潜ったこととのない我々は、2・3m先ぐらいしか見えない海は恐怖であった。遺物が検出されている現場まで泳いで行く間、調査員の小川氏から絶対離れないよう必死について行った。やがて、グリットの境界を示すロープが縦横に張られた場所に到着し、現在作業中の現場に至った。水深は13mぐらいである。どこにどのような遺物が検出されているかまるでわからないため、決して足を水底に付けずに注意して泳いだ。途中、縦横に張られたロープがタンクに絡まり「ドキッ」としたこともあった。恐怖でいっぱいである。

小川氏に遺物の場所を教えていただき、観察することができた。注意深く薄暗い水底を観察すると、船の残骸と思われる巨大な木材や、陶磁器、剣、鎌があたり一面に散乱しているのがぼんやりと見えた。完形に近い形で残っている遺物が多量にある。なんという保存状態の良さ。この海で、本当にモンゴル軍は沈んだのだという思いがどんどんこみあげてきて、とても感傷的になっている

自分に気づいた。遺跡を目の当たりにし、呼吸が速くなる。スキューバダイビングにおいて、呼吸が乱れるのは良くないが、まるで落ち着くことができなかった。楽しい時間はあっという間にすぎ、約30分程で潜水は終了し浮上した。緊張と興奮・感動が交互にやってきて、くたくたであった。

その後、Nも小川氏にエスコートされ調査現場へ。透明度についてはKと同じ印象を受けたが、ダイビング歴8本という貧相な経験のため無意識に足が海底につき、砂がまいあがって目の前の小川氏が見えなくなった恐怖は今でも忘れられない。潜水の前に小川氏が「周りが見えなくなった時はその



写真4 小川光彦氏から説明を受ける(N)



写真5 潜水準備(左がK)



写真6 青磁盤検出状況



写真7 兜検出状況

場を動かさないでじっとしてて」と言われたことを何度も自分に言い聞かせ透明度が良くなるのをじっと待っていた。小川氏が見えた時の安堵感といったら、涙がでるほどであった。

【調査見学2日目】

9月13日（金）。2日目もKからである。Kは実測の補助をすることになった。沖縄でも水中発掘調査を実践していきたいと思っているが、水中での発掘調査は未知の分野でいったいどのように調査を実施しているのか、その一部でも体験することが今回の目的であったため、よろこんでお手伝いをさせて頂いた。実測方法は？使用する道具は？レベルの計り方は？等々疑問がたくさんあった。

現場に到着し、目に入っただのは検出された遺物群の上に設置された2m四方の実測機（50cm単位のメッシュがくまれたもの）である。陸上のように水平に設置され、動かないように水底深く四隅に棒が打ち込まれているようだ。水底は砂地であるため、よほど深く打ち込まなければ簡単に動いてしまうであろうが、我々が実測機金属部の辺に乗ってもビクともしなかった。

しっかりしている。さて、気になる実測道具は・・・？マイラーである。さらに鉛筆・コンベも陸上と同様である。とたんに私は水中発掘調査に対する親近感が湧いてきた。実測したい位置にピンポールを立て、メッシュからの距離をコンベで計測するのだ。レベリングについてはさすがに光波等は使用できないため、実測機の四隅の棒にあらかじめ計測した絶対標高をマークしておき、その標高をもとに水糸とスタッフを使って遺物のレベルを計る。ということは水中での調査も陸上の発掘と変わらない、同様の技術水準をたもっている。もっとも実感したことは、やはり陸上と異なり呼吸・時間・バランス・思考等様々な制約の中で行う水中実測は、想像以上にストレスがたまる。この調査を実際、我々調査員が実施するには相当な潜水技術が必要であると感じた。しかし、実際に調査している人達がいる以上、なんとかなるのかな。

この日は2本実測の補助をさせて頂いた。少しずつ現場に慣れてきて、感じるだけでなく、自分の頭でいろいろ考える余裕がでてきた。今の私は自分の位置もわからず、方向感覚すらないことに始めて気づいた。周囲を見渡すと・・・、あいかわらず視界が悪い。実測をしている調査員すらよく見えないのだ。海底の遺物と、私の位置より高く縦横に張られたロープが見える他は何も見えない。実測をしているこの場所から離れたらどうやって陸上に帰ろうか、などと考えていた。どこかで、潜水士が使っているサンド・ポンプ・リフト（サンド・ポンプのスクリュウの回転力により水流をつくり、海底の土砂を周囲の海水ごと吸引する水中掘削機）のゴォーという音がする。遺物を検出しているのだろうが、水中では音の伝導が良すぎてどこでやっているのかわからない。



写真8 レベリングの補助（K）



写真9 実測の様子（小川光彦氏）

エアーが十分に残っている間は実測を続け、2本目が終えようとしていた。4日目の最終日は飛行機に乗るので潜水を行うことはできない。2日間で計3本の潜水であった。学生時代から水中考古学に興味をもち水中発掘調査の体験を望み、ようやく実現したものが終わろうとしていた。得たものは大きく、知りたいことがまだまだたくさんあったが、限られた時間ではこれが限界であろう。いつか必ず沖縄でも水中遺跡を発見してやる、と思いながら最後の浮上をしたのをよく憶えている。

NはKが1本目を終えた後、またしても小川氏にくっついて遺跡の案内をしてもらった。完全にお客様扱いで申し訳ない思いをしながら、今後沖縄で水中考古学を実践するにあたって、技術的な課題が多すぎることを痛烈に感じた。Kが2本目の実測補助をしている間も、調査地点の海面に無数の気泡が浮いてくるのを見ながら色々頭の中で整理していた。煮詰まったところでまずはシュノーケリングから、と調査の邪魔にならないところで浮き沈みしていた。それを見ていて不憫に思ったのか、九州・沖縄水中考古学協会の会長である林田憲三氏から「一緒にどうですか?」と誘われ、仲良く手をつないで現場をまわった。サンド・ポンプ・リフトを持った潜水士が目の前を通り過ぎていく時は、吸い込まれたらどうしよう～、などと考えてしまいかなり緊張した。



写真10 船での移動

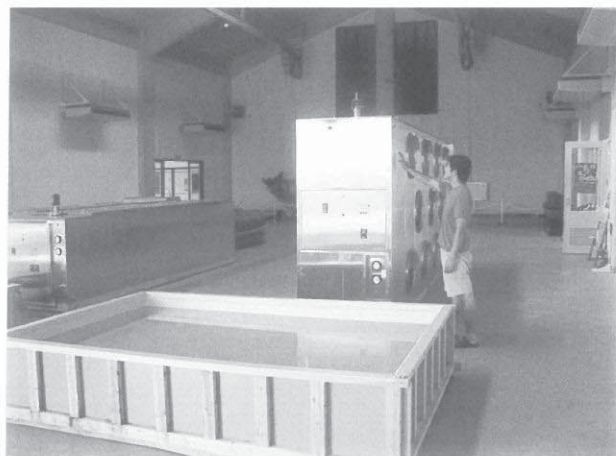


写真11 鷹島埋蔵文化財センター内の保存処理施設（含浸タンク）

【最後の夜～沖縄】

最終日は鷹島町名物（?）モンゴル村なるところに泊まった。モンゴルから輸入した本物のゲルに泊まれるのである。鷹島町は元寇により2度も島内を蹂躪された苦痛の歴史をもつにもかかわらず、現在はモンゴル国ホジルト市と姉妹都市として、友好を結んでいるのである。時が全てを洗い流して



写真12 モンゴル村のゲル群



写真13 鷹島町最後の朝、ゲルの中（N）

くれたのであろうか。

夕方はモンゴル村内にある温泉にはいった。露天風呂から見える眺めは抜群で、海が一望に見渡せた。この海からモンゴル軍が迫ってきたのだろうかなどと思いをはせながらゆったりとした時間は過ぎていった。夕食はモンゴル村の焼き肉屋でお別れ会をしていただいた。2時間後、酔っ払い二人がウロウロしていたらしい。翌日二人はさまざまな思いを胸に沖縄へと発った。

【おわりに】

周囲が海に面した沖縄は、先史時代から現代に至るまで海と関係の深い歴史を歩んできた。当然周辺海底には先史遺跡から沈没船のような遺跡が埋蔵されている可能性が高い。事実、海岸やリーフ内では遺物等がしばしば表面採集され、報告されている例もある（知名1979年）。水中考古学は、沖縄の歴史を多面的に理解する一つの方法として大きな可能性を秘めている。

今回、海底遺跡をどう考えていけばいいのか、また実際水中の調査を実施していくにあたっての技術的な面などについて様々なことを学ぶ機会に恵まれた。この貴重な体験を活かして、沖縄での水中考古学をより発展させていくよう日々努力していきたい。

【謝 辞】

鷹島海底遺跡見学にあたり、私達を快く受け入れて下さった小田嘉和教育長、神田稔事務局長、松尾昭子氏、内田比加里氏をはじめとする鷹島町教育委員会のみなさん、九州・沖縄水中考古学協会の林田憲三会長、石原渉副会長、小川光彦氏、野上建紀氏、加藤隆也氏、横田浩氏、山本祐司氏、並びに、現場の潜水士の方、今回の機会を与えて下さった安里嗣淳所長、盛本勲調査課長に深く感謝いたします。

（かたぎり ちあき：調査課 専門員）

（なかやま し ん： 同 上 ）

〈参考文献〉

- 知名定順1979年 「沖縄本島糸満市名城海岸リーフ採取の石器について」『花綵』沖縄国際大学考古学研究会O.B会
- 鷹島町教育委員会1992年 『鷹島海底遺跡Ⅰー長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 鷹島町教育委員会1993年 『鷹島海底遺跡Ⅱー長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 鷹島町教育委員会1996年 『鷹島海底遺跡Ⅲー長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 鷹島町教育委員会2001年 『鷹島海底遺跡Ⅳー鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書①』
- 鷹島町教育委員会2001年 『鷹島海底遺跡Ⅴー長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書②』
- 鷹島町教育委員会2002年 『鷹島海底遺跡Ⅵー鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書②』
- 鷹島町教育委員会2002年 『鷹島海底遺跡Ⅶー長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う発掘調査概報』